

冬夜書を読む（菅茶山）

雪擁山堂樹影深　澹鈴不動夜沈沈
閑收亂帙思疑義　一穗青燈萬古心

雪は　山堂を　擁して　樹影　深し

解説　冬の夜ひっそりとした雪中の山居に独り書を読んで古人の精神に触れる喜びを詠ったもの。

檐鈴　動かず　夜　沈々

語釈　※擁Ⅱすっぽりと包む。※樹影深Ⅱ木々のたたずまいが、深々としてゐる。※澹鈴Ⅱ軒につるした風鈴。※沈沈Ⅱ深く静かなさま。夜の更けてゆくさま。※乱帙Ⅱとり散らした書物。※疑義Ⅱ疑わしい意味。※一穗Ⅱ燈火は先が尖つて穂のようであるから、一つの燈を一穗という。

閑に　乱帙を　収めて　疑義を　思う

通釈　雪はこの山中の家をすっぽりと包み、木々のたたずまいも

一穗の　青燈　萬古の　心

深々としている。軒端の風鈴もひっそりと動かず、夜は深く静かに更けてゆく。とり散らした書物を整理しながら、書物の疑問を考えながら、青白くともる燈火を見つめてみると、心は遠くはるかな聖賢の心に通うように思われてくるのである。